

「…………っ、♡」

少年の吐息は熱く、震えていた。

給仕服の下にさし入れられた壮年男の武骨な手が、少年のきめの細かい肌を這い上がってくる。

「あ…………っ、♡」

思わず漏れた少年の声は、店内のカウンター横の蓄音機から流れるシャンソンに紛れ、おそらく他の客席には届かない。蓄音機は^{たんす}箆筒にも似た特製の木箱の内で鳴っており、店内の落ち着いた雰囲気^{きふき}を壊さぬよう今は木箱の観音開きの扉を半開きにされ、音量を抑えられている。けれど奥まった席にいる少年の声を掻き消すには、十分な音だ。

「♡ああ…、ん…………、」

それでも万一誰かに聞かれたらと、少年は慌てて口を手で塞ぐ。

汗ばんだ細い四肢がじんわりと熱くなっていくのが自分でもわかった。

男の手にじれたい程ゆっくりあばらを辿られ、脇下まで撫で上げられたかと思えば、

「!ッん” ……♡♡、」

唐突に胸の頂きを^お庄され、びくりと少年は身を跳ねさせた。

オレンジ色のランプが薄暗い店内を点々と照らしている。

ほの暖かいコーヒーとブランデーの香りが、バロック調の造りに統一された空間を上品に包み込んでいる。人々は手元の酒を傾けて、あるいは夕食のライスカレーやオムレツを食べつつ、それぞれの席で談笑に耽っている。

カウンターとホールを離れた奥の席で起こっていることなど、一般客の彼らには知るよしもない。

少年の給仕服の隙間に、別の男の手も入ってくる。

瑞々しい少年の肌の感触を^{たの}愉しむように、手は、今度はサスペンダーで吊ったボトムスの中にまで伸びてくる――。

大正××年四月。東京府某所。

歓楽街から少し離れた、看板建築の二階にその店があった。

クラシックな雰囲気です。昨今の派手さはないが、週末には常連で席が埋まる、そこそこ人気のカフェだ。

「ん” う……っ♡、……♡♡、」

仕事は給仕と聞いていたのに。

初出勤でいきなり奥の席の接客を任されたと思ったら、こんなことになっている。

「ん” …ッ、♡ん” …っ♡♡」

スラックスの中に入ってきた男の指先が、膨らみかけた少年の中心を執拗に捏ねまわしてくる。下着の上からとはいえ、初心な少年にとっては充分すぎる刺激だ。

店内の調度と同じ、深い茶色の北欧風パーテーションで仕切られた一角。四人の男たちが一般客とはあきらかにグレードの違う、ふかふかしたえんじのソファに座していた。中央にある低いテーブルには高い酒のボトルが並んでいる——。彼らの歳は四十から五十ほどで、全員仕立ての良いスーツに身を包んでいる。こんなことさえしていなければ、歳のわりに優美さを失っていないそれぞれの面立ちやお金のかかった恰好も伴って、誰から見ても品の良い、素敵な紳士たちに見えたことだろう。

「ん” ………う♡」

少年は彼らの一人——身長が高く、四十過ぎだというのにスーツの上からでもわかるほど若々しく厚い筋肉を持っている——の膝上に座らされ、先程から襯衣しゃつの中を弄まさぐられている。

「ほら……。乳首、こんなに硬くなってきたね」

耳元の声が低く囁く。

壮年男の声は若い男のような張りを失ってはいるが、それが却って、柔らかく深い色味を帯びている。——なんて感じてしまうのは、この店の大人びた雰囲気
のせいだろうか？

そうに違いない、と少年は心の中で強く頷く。

「こういうのは初めてかな？もし君が嫌だったら、今すぐやめてもいいんだけど
ね」

そう言った男の指は、とうとう少年の下着の中にまで入ってくる。

「や……っ、」

「ん？やっぱり嫌かい？」

反射的に身をびくつかせた少年に、男は優しい声音で問うてくる。

こんなの、嫌に決まっている——。

そう言うべきなのに、なんだか頭がとろけたようになって口が動かない。

状況から考えれば、少年は騙されてここにいるのだ。カフェーの給仕にしては高

すぎる賃金に釣られ疑いもせずやってきた自分も自分だが、それにしたって、こんなひどすぎる。少年には、今すぐにでもこの場を後にする権利があるはずだった。

「ひどい店長だなあ。あいつは昔から、こういうところあるからね」

男たちは少年の状況を察している。

が、少年が黙っていると再びその軀を^{もてあそ}弄びはじめる。

「ふふ……。ま、オジサンたちに付き合ってくれたら、お給金は弾むよ」

「こんなに可愛い子、滅多にお目にかかれないからなあ」

「見てよ。髪もさらっさら」

少年は男たちの腕の中から動けずにいる。

もちろんこんな経験、今までに一度だってない。見知らぬ大人たちに軀を好きにされるのは怖くもあるし、お金に困っているからとはいえ、自分の歳で身売りなんて良くないことだという分別もある。それに、嫌と言えないほど気が弱いわけでもない。

けれど――。

「……抵抗しないね？」

不思議と男たちの手を気持ち悪いとは思えず、彼らの^{おこな}行いを内心非難しつつも振り切る気にはどうしてもなれない。

なんとなく、男たちの雰囲気の数年前生き別れてしまった父親に似ているからなのか——。少年にはわからない。

「ま、嫌になったらいつでも言ってよ」

「無理矢理ってのは、オジサンたちも好きじゃあないからなあ」

少年は男の膝上に座らされたまま、背後からあばらを撫でられ、胸の頂きを時折捏ねられる。右横から伸びた手が半ズボンの太腿を這い、足元に跪いた男には靴下止めの金具を^と解かれ——、左横からの手に、下着の中のものをやんわりと握られる。

「……♡あつ、」

酒を飲まされたわけじゃない。なのに体が熱かった。

「硬くなってるね……」

そう言われながら熱持った幼茎をゆるゆると揉み込まれると、瞬^{また}く間に昇^{のぼ}りつめ
そうになってしまう。男たちに身を寄せられたままの瘦身が、びくんと大袈裟に
跳ねた。

「へえ、可愛い顔して、こういう気持ちいいことはもう知ってるんだ？」

口調は優しいまま少し意地悪な言い方をされて、顔がかあつと熱くなる。

「普段自分で、たまに弄^{いじ}ったりするの？」

別の男にも問われて、羞恥がどんどん増していく。

「ち…っ違…、あッ♡♡」

「嘘つき」

と言われつつ、幼茎を強めの力でひと擦りされた。

快感が疾^{はし}る。

根元から先端に向けて、男の大きな手のひらと指に扱^じきあげられたそこが一気
に熱持つ。

「あ……っ♡、あ……っ、♡」

もはやじっとしてられなくて、男の膝上で下半身を小刻みに震わせ少年は涙目になっている。下半身の震えに、時折びくんっ、と大きな跳ねが混ざるのがまた恥ずかしい。

「ほら見てよ。先っぽ、こんなにびしょびしょだよ？」

「あ……っ、」

男の手は容赦なく少年の、芯を持ったそこをスラックスから取り出してみせた。敏感になった幼茎が外気にさらされ、ぞくぞくとした感覚が下腹からこみあげる。店内の淡い照明に照らされ、透明な液に濡れた先端部分がてらてらと反射する。

「あ…っ、」

抵抗する間もなく半ズボンと下着を取り去られ、下半身が剥き出しになってしまう。おまけに靴下も脱がされているから、下半分はもはや一糸をも纏っていない。

「ほら、ほら……」

嘘をついたことを認めるとでも言うように、男の手は速さを増して少年の幼茎を扱き始める。

「今あんまり強く触ってないよ？こんなのでびくびくなっちゃうなんて……とても普段何もしてないとは思えないなあ？」

「♡あっ……ああ……、あ……♡、や…、」

男の手が行き来するたび腰がびくつく。

一枚薄い板を隔てた向こう側に大勢の人がいるというのに、下半身丸裸で恥ずかしい場所を男に責められ腰を揺らしているなんて——自分の現状を思うだけで、めまいがするほどの羞恥が襲う。

「ほら……、ほら……、もうこんなに硬い……」

「んう…っ♡♡あ……、ああ……っ♡も…だめ……、あ…っいっかい……、っ♡♡、いっかいやめ……っ、♡」

男の手はますます速さを増す。上下に擦られるたび、男の指に絡まった液がにちゅにちゅといやらしい音を響かせ始める。

「やめないよ」

「嘘をついた罰だからね」

「そん…な、っあ！ん” う” …♡ッ……♡♡」

左右の耳元で諫められながら、男たちに囲まれた小さな躰をびくびくとわななかせることしかできない。幼茎を責め立てる男の腕に抵抗を試みるも、少年の細い腕では敵いそうもなかった。

「♡ん” …っん” あ…ッ、あ♡……あっ！♡、ん” —————ッッ♡♡♡♡♡」

背後の男の大きな手に押さえられた口の奥深く、声にならない声が喉を焼く。腹の内から悶えるような甘い疼きが疾^{はし}り、ついに少年は吐精した。

「ふふ……、いっぱい出せたね。次は別の場所もいじめてあげるよ」

白蜜を給仕服のベストと自らの太腿に吐き出し幾分かぐったりとした少年の躰は、えんじ色のソファに寝かされる。下半身裸の無防備な恰好のまま、うつ伏せにさせられる。武骨な手が、今度は絹のような肌の小尻に伸ばされる――。